



「私は、なぜ山に行くのか？」

小野寺美佳

「登山は、そんなに好きではない」...気がする。

準備は面倒だし、山登りでは息が切れて足もがくがくする。翌日からは筋肉痛に襲われる。雨など降ろうものなら、帰宅後の片づけも大変だ。

2006年に、文さん（高橋文人さん）に誘われてクマさん会に参加した。以来、毎年4～5回ほど山行きに参加し、止める気はない。

もちろん、山は嫌いではない。行けば心動かされる風景に出会い、緑の香りにリフレッシュする。体は疲れたはずなのに、翌週は身も軽く元気がチャージされている。

しかし、だからといって一般のハイキングツアーに一人で参加することもないし、自ら進んで山行きを計画することもない。クマさん会のツアーに、おんぶに抱っこで連れて行って頂き、それで至極満足している。牛に引かれて善光寺...ならぬ、クマさんに連れられ山めぐりだ。

さて、何が良くて参加しているのだろうと考えた。

まず、山登る 温泉つかる 宴会列車の三点セットが楽しい。

次に、ゆるいつながりが心地よい。行きたい山に、行きたい人たちで出かける。出入り自由なところが、会としても私自身も長く続いている理由のひとつであることは間違いない。さほど熱心とも思えない私も、温かく迎え入れて頂いている。

そして、なによりもクマさん会の構成員が魅力的で、山でも宴会でも笑いがいっぱいだ。山だけでなく多趣味な方が多い。青梅の梅林では「ハイク×俳句」企画となり、にわか俳人たちは梅の香に包まれながら、眉根を寄せて空を睨むことになった。句といえば、箱根では、Y氏が靴ひもを締めなおしながら「年取ると、いろんなところがゆるんじやうんだよね」とつぶやくと、それに「靴のヒモ ゆるんで我が身 振り返る」と歌で応えるツワモノがいて、私は急登で息も絶え絶えに笑いこけた。

楽しい一方で、山での的確な判断や心遣いには、いつも感謝している。遅れがちになると、のんびり写真を撮る風にシンガリを務めてくれる方あり、明るい話題を振りまいてくださる方あり...

幸い大事には至らなかったものの、怪我人が出たこともあった。その都度、クマさん（熊本研一郎さん）はじめ、メンバーの皆さんの臨機応変な処理と決断力にリードして頂いた。

私は、クマさん会の面々に絶大な信頼をおいている。

クマさん会は、参加メンバーが広がったり新企画が生まれたり、ゆったりと環境適応する森のように、進化している。山行きも、異なる季節や異なるルートに、まだ見ぬ景色がたくさんある。まったく楽しみは尽きない。



こうして、「山」よりも「クマさん会」にハマった私は、案内メールが届くといそいそとスケジュール帳を開き、山帰りの翌日には生まれたての小鹿のような足取りで階段を下りるのである。